援助者の視点から見たスヌーズレンに関する一考察

－福祉施設での実践から－

小　出　さやこ

1. はじめに

スヌーズレン（snoezelen）とは、オランダ語のスヌッフレン（snuffelen）とドゥーズレン（doezelen）という二つの単語から出来た造語である。スヌーズレンとは、「人間のもつすべての基本感覚を刺激し、統合させ、機能させるための環境設定法」（河本，2003）であり、「訓練や教育法ではなく、重い障害をもつ人々が受け入れやすい感覚刺激を媒介に、人として互いの感覚や喜びを共感して過ごす」（山中，1997）という理念が重要とされている。スヌーズレンの目的は、障害をもつ人が自分自身の選択によって活動できる場で過ごすことで、生活の質を高めることにある。援助者はスヌーズレン利用者のペースを大切にして関わり、その反応をありのまま受け止め、利用者と共に楽しむ。そして必要な時には即座に適切な援助を行わなければならない。

2. 目的と方法

援助者に対する調査を基に臨床心理学的な視点からスヌーズレンを捉えることを目的とし、知的障害者通所更生施設Ａに勤務する４名の職員を対象とした半構造化面接を行った。

3. 結果と考察

半構造化面接により得られた結果を、「利用者の変化」「援助者の変化」「利用者と一緒にいる時の援助者の気持ち・考え」「スヌーズレンに対する思い」の４つのカテゴリーに分け、調査対象者ごとにまとめた。その結果より以下の考察を行った。

スヌーズレンと心理療法は、「共感」を重要視するという点において共通点が見られる。しかし、今回の調査対象者の「共感」という言葉の使い方は、「共有」「一体化」に近い使い方をしていると推察され、心理療法の「共感」とは異なると考えられる。一方で、共感の第一歩とも捉えられる側面も認められる。また、スヌーズレンにおける利用者の姿や選択をありのままに受け止めるという行為は、「受容」や「無条件の肯定的配慮」と同じ意味があると考えられる。受容的態度を単なる前提として捉えるのではなく、利用者との関係において重要なものであると改めて見つめ直すことが、スヌーズレンの実践において必要であるといえる。スヌーズレンは実践が中心であり、研究や理論はあまり発展していない。そのため、実践を行うに当たり、臨床心理学の視点というものが有用であると考えられる。